

もくじ 四箇領二十一ヶ所と瓦大師 1P 千住の酒合戦と闘飲図巻 (二) 2P
 文淵の日記から (三) 3P はたらく消防の写生展 4P



常善院 大師堂内 足立区大谷田1-33-15
 一番 瓦大師
 (台座裏) 明治36年/3月/南足立郡/東澗江/字大谷田/金子峯助
 *金子峯助は東澗江村の村長



この霊場は、明治三十五年に東養寺(越谷市東町)や東漸院(草加市柿木町)等の寺院や、浅草の講社の東講が整備し、再興しました。この年に『新四国四箇領八十八ヶ所・弘法大師道順記』という小冊子が刊行

四箇領八十八ヶ所とは、西新井総持寺(西新井大師)と宝光寺(八潮市大瀬)等により、天保十二年(二八四二)正月に開創された、中川両岸沿いの写し霊場の呼称で、四国になぞらえて澗江領・八条領・二郷半領・葛西領の四ヶ領に八十八ヶ所の札所を定めて付けられました。「西新井組中川通」と云う別称の示すとおり、西新井大師を一番とし、四国周囲の海に見立てた中川を、四国に同じく左手に見て、札番順に各札所を巡れる様に計画されています。



大師堂完成記念写真 長傳寺 (東水元)

「四箇領二十一ヶ所」の呼称は、普門院(八潮市二丁目)の大師堂の柱に打ち付けられた標札以外には見当たりません。二十一ヶ所霊場はその手軽さからか、記録が少ないのが特徴です。四箇領八十八ヶ所霊場は、全て真言宗寺院で構成されているので、札所本堂内の本尊の左手側に弘法大師木像が祀られており、大師堂の必要がありません。時代が下がるにつれていろいろな組み合わせで霊場が造られていきます。東講の名前の入った千社額や標札等が、今でも残っている札所もあります。東講は、葛飾区東金町の金蓮院の境内に、「二十一ヶ所」という線刻画を刻んだ二十一基の石碑を残しています。

足立史談

第581号

2016年7月15日

足立区教育委員会
 足立史談編集局
 足立区立郷土博物館内
 〒120-0001
 東京都足立区大谷田5-20-1
 TEL 03-3620-9393
 FAX 03-5697-6562
 (28-308)

しかりよう
四箇領二十一ヶ所と瓦大師
 上

小川政秋

足立の仏像展(平成二十四年度)でご紹介の瓦大師(瓦製造法の大師像)の広がりを探った研究が寄せられました。既知の四箇領八十八箇所から派生し二十一箇所霊場が成立したこと、そこに特徴的に像があることとの報告です。(編)

られ、他の宗派や個人宅等も札所に
加わる場合もあり、各札所にある大
師堂はそのほとんどが、他の霊場の
大師堂になります。

四箇領二十一ヶ所霊場には、各札
所に大師堂があったようです。

長傳寺(葛飾区東水元)という真
言宗寺院で、大師堂完成の記念写真
を写させていただきました。奇棟造
りの立派なお堂ですが、現存しては
おりません。

四箇領二十一ヶ所霊場の一番の特
徴は、他に類を見ない大師像です。
中川両岸には、良質な粘土が取れ、
煉瓦や瓦、植木鉢等が生産されてい

たそうです。子供の頃親戚の家が鉢
木鉢をつくっていて、庭に大きな窯
があり、植木鉢が所狭しと積み上げ
られていたのを覚えています。

常善院(足立区大谷田)に伺った
折に、御住職からこの真つ黒な大師
像が「瓦大師」と呼ばれている事と、
同じような大師像があるのは、瓦屋
さんの習作だと教わりました。

西福寺(三郷市戸ヶ崎)にも瓦屋
さんの習作と言われる大師像があり
ます。西善院(同市花和田)の御住
職からも、大師像は鬼瓦を造る様に
して造られている事を教わりました。

調査当初、大師像(瓦大師)が
残っているのは全て四箇領
八十八ヶ所の真言宗の札所寺
院と重なっていたので、長い
あいだ大師堂の存在が説明出
来ない状況でしたが、昨年の
二月に南蔵院(葛飾区東水元)
の万霊塔内に、六番の台座と
大師像を発見してやっとその
訳が解りました。

南蔵院は天台宗で、昭和初
期までこの地にあった聖徳寺
もまた天台宗でしたから大師
堂を建てる必要があったので
す。この霊場の開創は、明治
三十年以降で関東大震災以前
(一八九七〜一九二三年)と推
定出来るので(註)、札所は現・
南蔵院の場所に在り、廢寺と

番	札所名	本尊	所在地
一	典勇山 常善院	大日如来	足立区大谷田一ノ三三〇五
二	紫雲山 西光院	阿弥陀如来	足立区中川三ノ二二〇二五
三	恵日山 觀音寺	觀音	(不明)
四	東大峰山 向山寺	弘法大師	葛飾区東金町七ノ二
五	聖徳寺	聖徳太子	茨城県つくば市高見原二ノ一七
六	音水山 長傳寺	阿弥陀三尊	葛飾区東水元一ノ八二二五
七	仏生山 暹照院	不動明王	葛飾区水元五ノ五〇三三
八	翠林山 常楽寺	藥師如来	三郷市戸ヶ崎二〇一
九	龍光山 西福寺	阿弥陀如来	三郷市戸ヶ崎一ノ六二〇一
(一〇)			(不明)
一一			(不明)
一二	華嚴山 西善院	阿弥陀如来	三郷市花和田一八九
一三	狩場山 密乗院	阿弥陀如来	三郷市芝江一ノ二〇七〇一
一四			(不明)
一五			(不明)
一六	弘誓山 普門院	不動明王	八潮市二丁目二〇九
一七	大悲山 普門寺	不動明王	八潮市南川崎四〇〇
一八	雲水山 光明寺	阿弥陀如来	(廢寺・八潮市伊勢野六九)
一九	大神山 宝光寺	大日如来	八潮市大森五三
二〇	藥王山 福蔵院	阿弥陀如来	八潮市古新田三三
二一	龍慶山 大光寺	阿弥陀如来	足立区水三ノ一〇一〇一三

(注) 第五番の旧札所寺院名は不明

南蔵院の場所に在り、廢寺と

なった聖徳寺となります。長い間、
「四箇領八十八ヶ所」の残りの札所
は真言宗寺院と思っていました。が、
他の宗派の寺院にも可能性がある事
になりました。
昨年までに十五体の大師像を発見
しましたが、そのうちの何体かには
地震で被災したと思われる損傷がみ
られます。今年の二月には、西光院
(足立区中川)にも同じ仕様の大師
像があるのを知りました。また、つ
くば市の向山寺のホームページに紹
介されている「硯大師」がこの霊場
の第五番の「瓦大師」であること
も、葛飾区郷土と天文の博物館学芸
員、堀氏の御協力により判明致しま
した。(三郷市からつくば市への寺
院移転により遷座)
新たに二体発見したことにより、
二十一体中、札所不明(表参照)の
三体を含む十七体が発見されていま
す。関東大震災で罹災し消滅した大
師像もあるかとは思いますが、残る
四体の大師像を確認できる日が来る
事を願って止みません。
現在確認できている瓦大師につい
ては、次号でご紹介致します。
(註) 普門院(八潮市二丁目)の大
師堂には明治三〇年の記年の額が奉
納されており、そのころにはすでに
「四箇領二十一ヶ所霊場」が成立し
ていたとも考えられる。一つづく―

(葛飾区在住)

千住の酒合戦と闘飲図巻(二)

佐藤 秀樹

前号で、千住の酒合戦後につくら
れた闘飲図巻に、流布本と別本の二
系統があることを述べた。別本の成
立時期は文化十四年(一八一七)と
したが、契機となったのは同年五月
二十五日に千住仲町の源長寺で開催
された書画会と考えられる。

足立史談78号に瀧善成氏が紹介さ
れた「千住鯉隠居太平餘楽酒戦の図」
は、一九八七年の足立区立郷土博物
館「千住の酒合戦と江戸の文人展」
にも出展されたもので、文化十二年
の酒戦図に新書画展覧会引札(宣伝
ちらし)と当日酒量勝負附を貼合せ
て一軸としたものである。

この引札と酒量勝負附には開催年
の記載はないが、郷土博物館蔵の古
記録『旧考録』の「山崎鯉隠、高
陽闘飲再会」には文化十四年五月
二十五日と明記される。引札は「千
寿酒戦録并高陽闘飲図譜」の展覧を
告知するが、展覧だけでなく販売も
企画され、新たな図巻がつくられた
ものと考えられる。

新潟市東区にある展示施設・巻菱
湖記念時代館所蔵の図巻は別本であ
る。残念なことに鵬斎の高陽闘飲序
から前が切取られている。鵬斎の書

や文晁の書に人気があることから切取られたようである。この図巻は、画風は異なるが極めて丁寧に描かれているうえ、巻末に「文政二年己卯六月、武州千住掃部宿住人、鯉隱居士所持」という識語が記されている。販売目的の別本と思われる。

同じ別本でも、郷土博物館本図巻にのみ記される「出すその盃は」の記載は何を示しているのか。大田南畝により草稿から別本原稿がつくられ、それを代筆者が清書して図巻がつくられた。南畝本人が郷土博物館本図巻を清書する際に別本原稿の脱漏に気づき補記したものと考える。

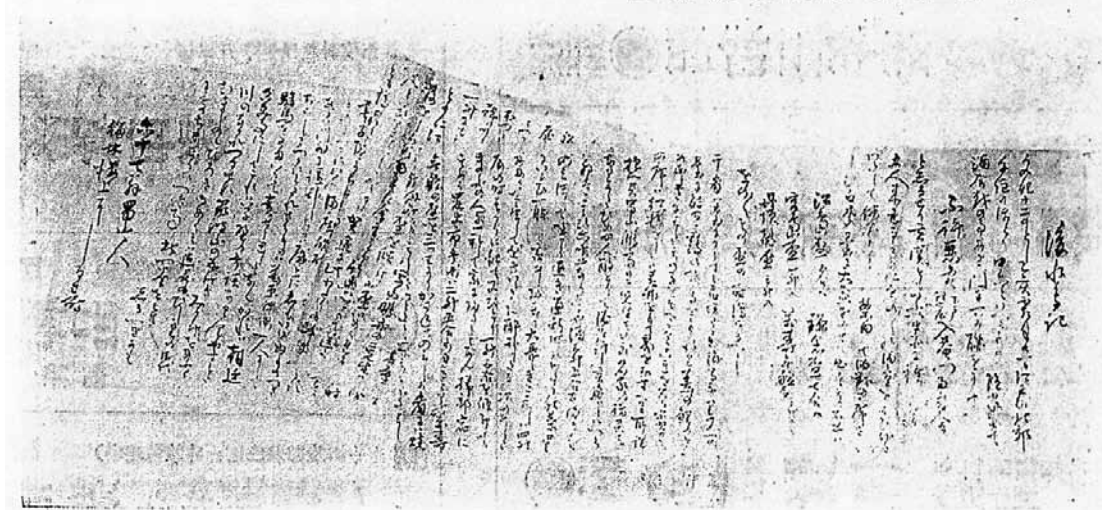
別本原稿の存在は、永井荷風の遺した記録からうかがえる。荷風の自筆稿本『荷風文藁』天理図書館蔵に「蜀山人文藁の後に書す」と題する識語が記されている。荷風が親交のあった二世市川左団次から南畝自筆の「後水鳥記」稿本一巻を見せられ、請われて巻尾に識語を記したということである。一部を抜粋すると

「千住の酒家中屋六左衛門が隠宅にて催されたりし酒合戦のことを記したる草藁なり、此の日の記文は山人が随筆一話一言増補（中略）の中にも収め載せられたれば、かれとこれを照合すに文辞に異同ありて推敲の跡おのづから明なり」とあり昭和三年（一九二八）と記される。

が「中屋六左衛門」と記されることや「一話一言増補」とあることから、荷風は、明治四十一年刊『新百家書林 蜀山人集』あるいは昭和三年四月刊『日本随筆大成』（旧版）所収の「一話一言」の「後水鳥記」と「蜀

山人文藁」を見比べている。荷風は大正十四年（一九二五）に南畝の草稿『七々集』を借覧し、写しているが、「後水鳥記」が取り外された後の現存のものと同じである。『七々集』にあった草稿は見えていない。

三 蜀山人自筆後水鳥記



(寸三尺四巾寸六釐)

荷風の見た別本原稿に似た

ものが『書画骨董雑誌』第二五六号の「本社現在書画目錄」のなかに「後水鳥記」として翻刻と写真（上）が掲載されている。写真は「蜀山人自筆後水鳥記」、「堅六寸巾四尺三寸」とあり一部を折り重ねて全体が示される。この号は昭和四年十月発行なので昭和三年に荷風が見たものではない。蜀山人自筆とあるが、巻末の居号「緇林楼」に違和感があるうえ、文字が左に寄っていく南畝の書癖もない。門前の聯「不許悪客 下戸・理窟 入庵門 南山道人書」が他より大きな文字で目を引き、翻刻も大きな文字で記される。盃の名称の前に「出すその盃は」の記載があるとところから、郷土博物館本図巻あるいは荷風の見た別本原稿から転写されたものと考えるのが妥当である。

(元郷土博物館職員)

文測の日記から (三)

医師との交流

郷土博物館

文測は、多くの絵師と交流のあったことは日記からうかがえますが、絵師とは別に、懇意にしていたことがうかがえる人物がいます。

その人物は五十嵐其徳。文測の日記『葉菴雑記 卷三』、嘉永五年十二月三〇日が初出です。

嘉永二〜四年六月までを記した『葉菴雑記 卷一』には登場しないので、嘉永五（一八五二）年以降の親しい付き合いかと思われます。嘉永五年から七年（安政元年）までを記した『葉菴雑記 卷三』には、頻りに登場し、続いて安政三年三月まで記された『葉菴日記（一）』で、二月に其徳の娘が来たことの記述が最後になります。文測は、安政三年の九月一二日に亡くなります。『葉菴日記（二）』で、八月二五日まで日記を書いています。五ヶ月間全く登場しなくなります。

天保三年から十年までである『注文簿』の方では天保七（一八三六）年に名前があるので、そのころから付き合いはあったのでしようが、日記に残された足掛け五年ほどの記載のなか、とくに嘉永七年は頻繁です。

「菜菴雜記 卷三」

【二】嘉永六（一八五三）年五月

同十四日 天氣

- 一、自分栗原村植付帳面持参
- 一、同日昼後五十嵐其德來成田山額持参并悴金次郎入門

【二】は、其徳が文測に描いてもらうべく成田山に奉納する額を持参し、また、息子の金次郎を弟子入りさせた記述です。「菜菴雜記 卷二」の巻末にまとめられた「嘉永六癸丑年春正月ヨリ書画出来之記」には、六月に「画手本 一 五十嵐金次郎」との記載があり、金次郎が入門したために画本を描いて渡したことがうかがえます。

「菜菴日記 (一)」

【二】安政二（一八五五）年二月

廿五日 風

- 一、五十嵐其德悴金次郎参
 - 一、かし包
 - 一、もなか折一
 - 一、をばこ苧ツ
- 右持参
- 一、同奉額連中昨日成田山より帰額相納候二付四人世話人礼二来ル
- 金五百疋持参

ちなみに、のちに【二】の記述がみられ、【一】のときの額のことを指すのではと思われる。

文測は、小塚原（現、荒川区）に住む其徳のもとにしばしば立ち寄り、また、節供など季節に応じて、都心に住む親戚たちと同等に、花や野菜を届けさせています。五十嵐親子は、年頭や盆の挨拶に来るなど、師匠に対する礼の様子もうかがえ、そのまま食事や酒を出されて夕刻まで滞在することもあります。

弟子となった金次郎のためか、手本画を描いたり、貸したりするほか、文測が江戸へ出る際のついでに立ち寄るときには、ネギや蓮などを土産にしています。

「菜菴日記 (三)」

【三】嘉永七年六月

同三日 薄曇天氣

- 一、兼て約束故自分小塚原五十嵐其徳方へ○牛頭天王祭礼二行酒赤飯出ル夕刻帰宅薄茶出ル
- たまご十五ミやけ持参

とくに、【三】は、六月三日の天王祭（素盞雄神社（荒川区南千住）の祭礼）の見物に招待され出かけた記述です。小塚原に住む其徳らしい招待です。

さてこの五十嵐其徳とは、どのような人物なのでしょう？ 早稲田大学の古典籍データベースに当たりました。ここに小関三栄から五十嵐其徳に、「千住小塚原二而五十嵐其徳様小関三栄」と宛てた手紙が掲載されていました。小関三栄は、蘭方医で、幕府の天文方阿蘭陀書籍和解説御用を務め渡辺華山・高野長英と親交を持った人物です。蚕社の獄の際、華山・長英の入牢を聞いて自害しました。

取にいかせたところ、「盆斗り参香炉ハ近日可遣趣」と香炉の返却記述のないまま日記は終わることになります。などの記述があります。小関三栄の手紙からは、五十嵐其徳が医師として相当の知識と教養があることがうかがえます。其徳は、絵師としての文測の技量を認め、また文測は、先進的な知識について情報を得る相手として其徳を認めていたのではないかと思います。このような人物と話ができる文測の教養もかなりのものであったことがわかります。絵師と医師との交流は興味深い限りです。

夏休みは親子で郷土博物館へ！

はたらく消防の写生展

会期：8月2日(火)～28日(日)

東京消防庁主催の「はたらく消防の写生会」に寄せられた作品の内、区内八つの小学校の生徒たちによる作品、百二十八点を郷土博物館で展示します。各小学校を訪問した本物の消防車や消防署員を目の前に、子供たちの自由な視点と感性で描かれた秀作の数々を、ぜひご覧ください！

〈展示作品の小学校〉

- 東加平小学校／東綾瀬小学校／北三谷小学校、東洲江小学校／長門小学校／花畑小学校／花保小学校／中川小学校